

語ったものである(「海上の道」)。北方説・南方説は日本人や日本語の起源とも係わらせて議論されたが、残念ながら現在では東進説が有力な説となっている。ただし、東進説にも長江下流域から直接に朝鮮・日本へ来たとする東進直接渡來說(安藤広太郎)と、山東半島付近から西部朝鮮を経て日本へ来たという東進間接渡來說(岡崎敬・坪井清足・佐藤敏也)とがある。

近年、この稲の到来についてのユニークな説が渡部忠世によって提起されている。氏は、15年間の東南アジアでのフィールド・ワークの結果、「アッサム・雲南」地方にアジア栽培稲の起源があったこと。その稲が、揚子江系列で中国から日本へやってきたこと。古代稲は、水稲と陸稲の区別がなかったこと。インドシナ内陸部での10世紀以前の稲は、ラウンド・タイプやラージ・タイプのジャポニカ類似の陸稲が圧倒的であること、等々の創意に富む発見をつづけている。

しかし、氏の日本への稲の到来についての発言は禁欲的で、縄文末期に日本へ渡来した稲は、「水稲あるいは陸稲とどちらかひとつに断定しにくく」、「わが国の水稲も最初は山間傾斜地の天水田などに栽培がはじめられた」と予想される。このことに、嵐嘉一の稲の作季・草型研究からの結論、日本の古代稲は、旱稲・早植であるという意見を加えると、日本古代史の稲作についての常識は、大きな変更をせまられる。まず後者から見ると、西から東へと広がった弥生時代の稲作は、感光性の強い晩稲から感温性の強い早稲へと進化したという学説は、少なくとも稲の生態学からは修正を必要としている。また、前者の議論は、私たちに「縄文農耕」の可能性を考える場合の想像力の翼を広げてくれる。

かった故実によるとされたもので、祖先の追体験型である。また、和歌山県の新宮市近くには粥餅村という村があり、この村では旅僧(実は弘法大師)を虐待したために、いくら餅を搗いても粥になるという伝承がある。弘法大師伝説と異郷人虐待とが結びついた型である。

このような風習については、既に戦前から折口信夫らによって注目されており、折口は、祭の忌が厳しかった土地で、音を発する臼杵を用いる餅搗きをはばかったのだ(「餅搗かぬ家」)、という説明をしている。この折口の「物忌説」が民俗学の通説となっていたのだが、近年、坪井洋文らの体系的な研究によって、折口説は厳しい批判にさらされている。坪井は、餅=白色に対するタブーは、餅=白色=水田稲作農民(文化)とは異なった、雑穀・根菜食品=赤色=火=畑作(焼畑)民(文化)の系譜が存在し、その人々が〈餅なし正月〉の担い手であったと推論する。〈餅なし正月〉=焼畑文化とする結論には飛躍を感じるが、日本のなかに様々な民俗的習慣のあることには注目する必要がある。

稲の道

坪井らの「稲作単一史観」という批判もあるが、ここではもう少し日本の稲作文化の問題を考えてみたい。まず稲作の開始だが、戦前から日本への稲の到来ルートについては、浜田耕作らの北回り説(中国→北部朝鮮→南部朝鮮→九州)と、柳田国男の南回り説(中国→南島伝い→九州)との対立する意見がある。柳田の説は、学生時代に三河地方の伊良湖崎に遊んだ時、ヤシの実の流れつづのを見て着想し(その話を友人の島崎藤村に語って、「ヤシの実」という歌が出来た)、晩年になって子安貝を求めて日本に来た南方の人々が、稲を持ってきたという構想を

10年ほど前から中根千枝、イザヤ・ベンダヤンらによって「日本等質社会」論が強調されているが、近年、日本人と日本文化が単一・同質であるとする議論に、幾つかの疑問が出されてきている。沖縄史や北海道の少数民族(アイヌ、オロッコなど)の例をあげるまでもなく、日本“本土”のなかに異なった民俗的習慣のあることを、民俗学者たちは指摘している。その一例を〈餅なし正月〉にあげよう。

餅なし正月

普通、日本人は正月に餅を食べる習慣を持つが、餅を食べない人々がいる。いや、食べれば悪いことが起きるとして、餅を食べることを禁忌してきた人々がいる。それが〈餅なし正月〉である。

現在、その家族・同族・村落の事例が、100例ほど紹介されている。彼らは、現在の調査では北海道と沖縄を除いて全国的に分布しているが、特に正月に餅を食べることを強くタブー視しているのは、関東と四国地方に多く見られる。その地域は山間部や離島に限定されることなく、東京都内や大阪の鴻池家のような大都会での生活者のなかにも見られる。

それでは彼らは、餅にかわって何を食べるのであろうか。これにも共通性が見られ、ソバ・アワ・ムギ・マメなどの雑穀類や、イモ・ダイコン・カブなどの根菜類が調理されており、畑作物という共通項がある。彼らが餅を食べない理由は、祖先からの伝承によるが、その伝承も、祖先の困窮を追体験する型、戦争や落人伝説にかかわらせる型、異郷人虐待によって正月の餅搗きを禁じられた型に分類することが出来る。大阪の鴻池家は、山中鹿之助を遠祖とする説があり、鹿之助が困窮して餅をつくことが出来な



その議論にはいる前に、渡部らの東南アジア稲作の研究によって、アジアにおける稲作の発達が、タイの浮稲（河の水位に合わせて稲の節の間が伸び、5メートルを越すような深さの水にも耐えるような水稻）などのように稲の生態を変化させる方法と、日本のように水田の灌排水を精密にして耕地条件を進歩させる方法のあることを教わったことをつけ加えておく。

「縄文農耕」の可能性

日本に初めて到来した稲が、早稲で水稻にも陸稲にも使える可能性の強い品種だとすれば、日本の稲作の開始を、奈良県の唐古遺跡のような平坦部の遺跡のみに代表させることには疑問がでてくる。日本の稲作は、高地の谷間地で、排水の容易な所から発達したと見るのが自然である。

日本の考古学者や古代史家は、稲作遺跡というと唐古や静岡県登呂のように平場での遺跡のみを考えるが、稲の習性や東南アジアでの一般的なケースから言えば、稲作は高地の谷間地などに植えられた粗放な稲からスタートしたのではないだろうか。また考古学者たちは、作物の栽培と言うとおおげな灌漑施設を考えるが、紀元前、人類が最初に栽培した作物はバナナである。古代日本のような照葉樹林地帯では、タロイモ（山芋）などの粗放な作物を山間部の谷間に植えることも立派な農耕である。

そこで気になるのは山間部の焼畑農耕の研究である。しかし、「オカボが日本の焼畑の主作物であったという痕跡はきわめて乏しい。ごく一部の地域を除き、日本の焼畑の主作物は、アワ・ヒエ・ソバのような雑穀類や豆類とイモ類に限られている」（佐々木高明『稲作以前』）と言われている。ここから焼畑農耕と水田農耕を

対立的にとらえ、二者択一的な議論をするひともいるが、これは現在の話である。歴史的には焼畑農耕から陸稲、水稻への技術的な転換が容易に行われていることは、今日の東南アジアの稲作の歴史を見てもわかる。イモのような炭水化物や高地性集落の稲作は、その遺跡を残しにくいところから考古学の対象となり難いだろうが、平坦地中心の学問から山間部の学問へと発想の転換をせまることが、まず必要ではないだろうか。

また、いまひとつ疑問を提示すれば、弥生時代の代表的な水田遺跡として必ず登呂遺跡が使われることも不思議である。重粘質の土壌に矢板を無数に打ちこみ、9ヘクタール余の水田を造成し、水路まで開削した登呂遺跡のような半乾田は、むしろ例外的なケースではないだろうか。登呂遺跡の技術と労働は、渡来人たちの先端的な技術を想定しなければ不可能である。私は弥生時代の稲作には、縄文農耕（＝イモ栽培）の系譜をひく山間部の稲作と、渡来人のもたらした技術による唐古・登呂などの先端部の平場での稲作と、二つの発展コースがあったと考える。

日本「民族文化」論

稲作との係わりでもう少し議論をつづけると、私が日本史を教えるなかで最も悩む問題のひとつに、縄文文化（社会）と弥生文化（社会）との関係の問題がある。縄文文化は千島・北海道から沖縄まで存在が確認されるが、弥生文化の範囲は稲作が伝播した範囲である。弥生文化は、東北から薩南諸島まで存在すると言われているが、東北には縄文晩期の根強い文化があり、南九州には独自の文化圏があったことは有名である。また、後代の稲作技術の発達から見ても関東以北に稲作が急速に普及したとは考え難い。

次のような有名な話がある——

愛宕山に修業していた聖人を獵師が貴んで、時々食物などを寄進していた。ある時、獵師が訪ねると、「最近、まことに貴いことがある」「毎夜のように普賢菩薩が御出現になる」、聖人は獵師に留まって拝んで帰れと言った。その夜、獵師もおこもりをしていると、確かに白い色の菩薩が白象に乗ってしずしず下りてくる。聖人は泣く泣く礼拝しているが、獵師は「聖人の眼には見えても、われら不信の徒に普賢菩薩の姿が見えるはずはない」と考えて、弓を引きしぼって射たところ、正体は大きな野猪であった。（巻20-13）

この話のなかに、変革期に生きる人間の力強い合理主義を見る意見もあるが、主人公が獵師であることにも注意してもらいたい。「今昔」の作者は、「罪を造る獵師」と呼んでいるが、彼の思慮と勇気をたたえている。

柳田国男は、山民の一般的な特色を、「正直・潔癖・剛気・片意地・執着・負けざらひ・復讐心その他」で、「彼等を祖先とする者の血は、里に入り町に入り農民の中をくぐり、今日の所謂大衆の中に混入してしまった」と語っている（「山立と山臥」）。私たちは正月に餅を食べない、頑固な「縄文的狩猟民」の末裔たちを愛したい。（大阪外国語大学講師）

＜参考文献＞

- 折口信夫『餅搗かぬ家』1929年（『折口信夫全集』第16巻、中公文庫）
柳田国男『海上の道』1961年（岩波文庫）
盛永俊太郎他編『稲の日本史』1955-63年（筑摩書房）
中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』1966年、岩波新書
古島敏雄『土地に刻まれた歴史』1967年、同上
佐々木高明『稲作以前』1971年、NHKブックス
嵐嘉一『近世稲作技術史』1975年、農文協
佐原真『農業の開始と階級社会の形成』（岩波講座「日本歴史」第1巻、1975年）
渡部忠世『稲の道』1977年、NHKブックス
坪井洋文『イモと日本人』1979年、未来社

とすると、弥生文化一大和政権一律令国家と言っても、近畿と北九州を中心とした地域の歴史であり、北海道・東国や南九州などの歴史は脱落してゆくのである。いや、むしろ5世紀の倭王武の上表文に見られるように、彼らは毛人・衆夷と呼ばれ、後には蝦夷・熊襲・隼人などと呼ばれるのである。そこで、どれだけ生徒が、大和政権や律令国家を築いた畿内の周辺に、縄文時代以来の狩猟・採集経済をつづけている人々がいることを理解できるであろうか。律令国家の条里制や公地公民制では、狩猟民である彼らを十分に包摂できなかったことは、8世紀の彼らの「反乱」によってもわかる。アイヌはもちろん、東国や南九州・薩南諸島などでの古代・中世史の研究が進み、歴史教育にも反映することを切望する。

しかし、古代社会は簡単に狩猟民の伝統を排除していない。古代では、祝いごとを生業とする民をハフリの民と呼んでいる。ハフリとは、「祝」だけではなく「葬」「屠」をも意味している。これは祝い事の際に「供儀」のため、動物を屠るということをおこなったからである。古代の文化は「生贄の文化」であり、中世は「ケガレとキヨメの文化」である、と言った歴史家がいる。至言であり、古代の祭祀には生贄がともなっている。民俗学でも餅は人間の心臓を形どっており、おむすびが三角形なのは神にささげた兎の心臓が三角形であったところから来ているという議論がある。稲作社会が拡大し、仏教などの影響で殺生を禁断するイデオロギーが浸透するなかで、生贄文化は衰退して屠殺などを不浄視する見方が広がっていったのである。

それでは狩猟民の伝統は、その後の日本歴史のなかでは消滅してしまったのであろうか。12世紀の前半に成立した『今昔物語』のなかには、